はくさん

第2巻　第3号

石川県白山自然保護センター

もくじ

白山岩間温泉でのヒメハルゼミ……松尾秀邦……1

白山麓の焼畑2，焼畑耕地の分布……松山利夫……3

夏の自然教室のこと……5

山日記……6

石川県の自然公園　5

　　越前加賀海岸国定公園……7

たより……8

表紙解説

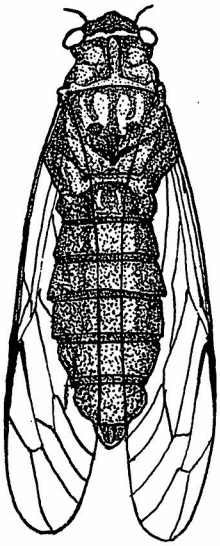
室堂ビジターセンター・宿泊施設

白山連峰の主雄，御前峰（2,702 m）を真近かにした室平に，それまでの旧施設に代えて建築開設されたのが，現在の一連の室堂施設です。ハイマツの樹海とお花畑に囲まれ，別山をも眼のあたりに眺望できる位置にあって夏山シーズンには，広く利用されています。

施設は，食堂や郵便局，診療所など登山者の便宜を図るビジターセンターと，白山荘，くろゆり，しゃくなげ，御前と呼ばれる4棟の宿舎で構成されています。うち白山荘はおもに自炊利用者に使用され，冬山唯一の利用施設です。全体の収容能力は1,000名，最高時には約2倍程になることもありますが，安全で快適な山旅が約束されているわけです。　〈自然保護課〉

白山岩間温泉でのヒメハルゼミ

松　尾　秀　邦



ヒメハルゼミ

田中　均原図

今から20年前，当時小学校六年生であった庄司彰君（現在は仙台工専の先生である）の白山登山の足馴しということで，瀬戸野から歩いて岩間温泉（現在はないが，尾添の人が経営する宿泊設備があった）に至り，翌日，噴泉塔を見学しようと一度は登って来た道から外れて川原に下る途中の出来事であった。

一声ハルゼミの様なと思った時，午前8時を過ぎたばかりなのに一斉に全山蟬時雨となった。耳を聾するばかり，暫くすると潮のひく様に声がしなくなり，今迄の奇妙な声は何処えやらと思う間もなく，一声挙った途端耳を覆いたくなる様な大合唱となる。目の前に飛んで来た奴は如何と伺うに，すばしっこそうなツクツクホウシに似て，ヒグラシを一廻り小型にした様な，一寸僅り痩せ型の〝セミ〟である。これが真直ぐに伸びたミズナラの小枝にしがみつくや否や大声を出したのである。ツクツクやカナカナを手づかみにした経験があると威張って見せて，一応は手を伸ばして見たが，急坂の谷側の枝なので，見た目には近いが残念乍ら届かない。

その声は高島春雄著〝滅びゆく動物たち〟（昭和32年5月15日，中央公論社刊行，P.170）によると，カルル……メンニョニョーと音律的に聞えると述べられているが，到底あの華奢な身体からとは思えない音質・声量である。それは細面の美人が野太い声で，いうなれば稲垣美穂子的人物が和田アキ子的蛮声を張り上げているという感じなのである。

何処かで聞いた様な声だと思った。嘗って，台湾新竹州の三井経営の紅茶工場を見学しに，山奥まで〝台車〟（トロッコに似た台湾山地での人力交通機関）を駈しらせていた時に，これに似た経験をもった事を思い出した。正月三日にセミが鳴く，同行の大人達はハルゼミだなと云った事と，その声の奇妙さと喧かましさが頭の隅にこびりついていたのである。

処で，1957年（昭和32年）5月25日に前記の高島春雄著を旅先の仙台で購入し，ヒメハルゼミの項（PP.165～182）を読んで驚いた。

発生の日時（確実な日時は忘れたが，庄司君が附属小学校の児童であったから，夏休みは7月11日からである。普通校が夏休みになる7月21日以后は白

山路は混むと判断し，梅雨あけになった頃の7月20日頃金沢を発ったと思う），声，形と，これはヒメハルゼミであると判断したので，早速高島さんに手紙を差上げ，白山々麓，海抜800 mのブナ・ミズナラの雑木林でヒメハルゼミらしきものを聞いた事を御知らせした。

早速の御返事を戴き，ヒメハルゼミに間違いなし，今迄のヒメハルゼミの発生地は平野部か丘陵地帯（海抜300 m位）であるので，発生地の海抜高度800 mは始めてである。ついては亦，今迄の発生地の岩層の地質は如何と御尋ねを戴いた。

これには，動物生態学者が地質学的現象に興味を持たれるのは結構だが，第三紀以降の気候変化による植生とセミの生態とは関係があるかもしれないが，セミの発生には地質学的条件は何等関係がないのではないかと申し上げた処，お前の〝字〟は読み難いとのお叱りを頂戴した。この件は高島さんが亡くなられたので，そのままになって終っている。

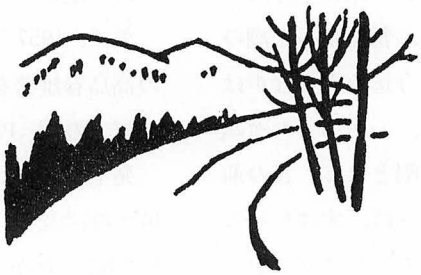
地質学的条件は兎（と）に角として，日本海側では新潟県西頸域（くびき）郡能生（のう）町の発生地が天然記念物になっている。この町の山奥の能生谷や名立谷の上流地域の第三紀の黒色頁（けつ）岩層には，我が国でも珍らしい新生代のカイダコや滅多に産出しない褐藻類が多産するので，採集に幾度か出掛け，発生地近くで幾度も宿泊している。しかし，夏期の海水浴シーズンを避けているので，ヒメハルゼミ発生の時期には，発生地の白山神社々叢を目の前にしながら，ついぞ足を運んだことがないのである。

また，兵庫県城崎郡城崎町付近での発生地が大阪市立大学の花粉学者粉川昭平さんによって，1953年に能生町に次いでの日本海側の新発生地として報告されている（前掲参照，P.176）が，これも付近を通る時は夏期を避けているので，ヒメハルゼミには御目に掛ったことがないのである。

上記両地の中間にある白山々麓で，彼等の大合唱を聞いた事はどうも良い機会に恵まれた様で，その後は，その機会に恵まれていない。

それにしても，南方系といわれるヒメハルゼミが海抜高度800 m，冬期積雪の多い生活条件の悪い地域に，良くも発生しているものであると感心する。

この様に，生物が点在分布をしめすという事は，Relict species（残存的種）の条件として第一に挙げ得る現象であるので，日本海側に点在するヒメハルゼミ発生地の一つとして，白山々麓岩間温泉は，噴泉塔の高温水に棲息するオンセンアブの仲間の外に昆虫生態学に貴重な資料を追加しているのである。



白山麓の焼畑　2

焼畑耕地の分布

松　山　利　夫

I

白山麓では，焼畑のことを「ナギハタ」とよんでいます。〝ナギ〟というのは，草やかん木を刈るのによく〝ナギはらう〟とか〝ナギたおす〟とかいいますが，きっとそういう意味だと思われます。

ナギハタが白山麓に一番さかんにひらかれたのは，いつの頃かはっきりしません。いまわかっているのは，江戸時代には，もうすでにさかんだったことだけです。ナギハタを営なんでいた農家の数も，古いことはわかっていません。手元にある報告をみますと，昭和の初めの数字だけはわかります。これによれば，白峰村は112戸で，当時の全戸数の約28%にあたる農家がナギハタを経営していたことになります。同じように尾口村では322戸で47%，吉野谷村は52戸で11%になっています。

II

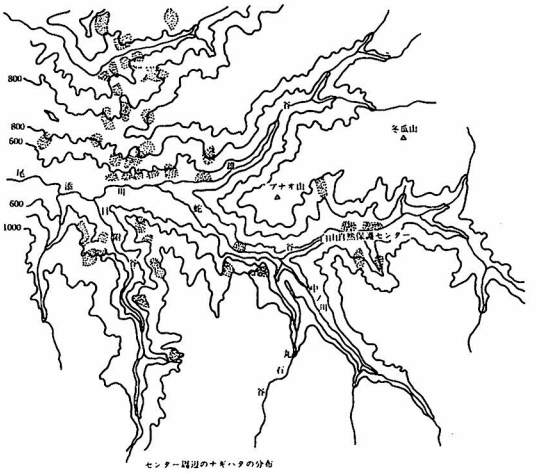
こうした数多くの農家がナギハタをひらき，そこでヒエやアワなどの作物を栽培してきたわけですが（栽培された作物の種類や作付けの順序などは，のちにふれることにします），いったい，ナギハタは白山麓のどのあたりにあったのでしょうか。これをつぎのページの略地図でみてみましょう。

白峰村のナギハタの分布図（その一部分だけ図示してみました）では，前回にも少しふれましたように，ほぼ1200 m以下の山地の斜面に多いことに気がつきます。しかも，村の全域にわたってかたよりなくナギハタがみられます。もっとよくみると，白峰や桑島の村から大変遠いところに開らかれています。そのため，村からナギハタまで毎日通っていたのでは，作物のせわができません。それでふつうこうしたところでは，山に家をたてて家族ともども生活しながら，作物を栽培していたわけです。この家が〝出作り小屋〟とよばれるものなのです。

つぎに，白山自然保護センターのまわりでナギハタがあったところを，みてみましょう。これでみても，やはり1200 m～1000 m以下の斜面に開らかれていたことがわかります。

自然保護センターをおとずれ，自然観察園路を歩いたことのある人は，園路の入り口近く，センター本館のすぐ背後や，園路の途中のカジヤ谷広場で，ナギハタ耕地のあとや出作り小屋のあとを観察されたことと思います。もし，まだ見ていない人で，こういうことに興味があれば，一度おたずね下さい。

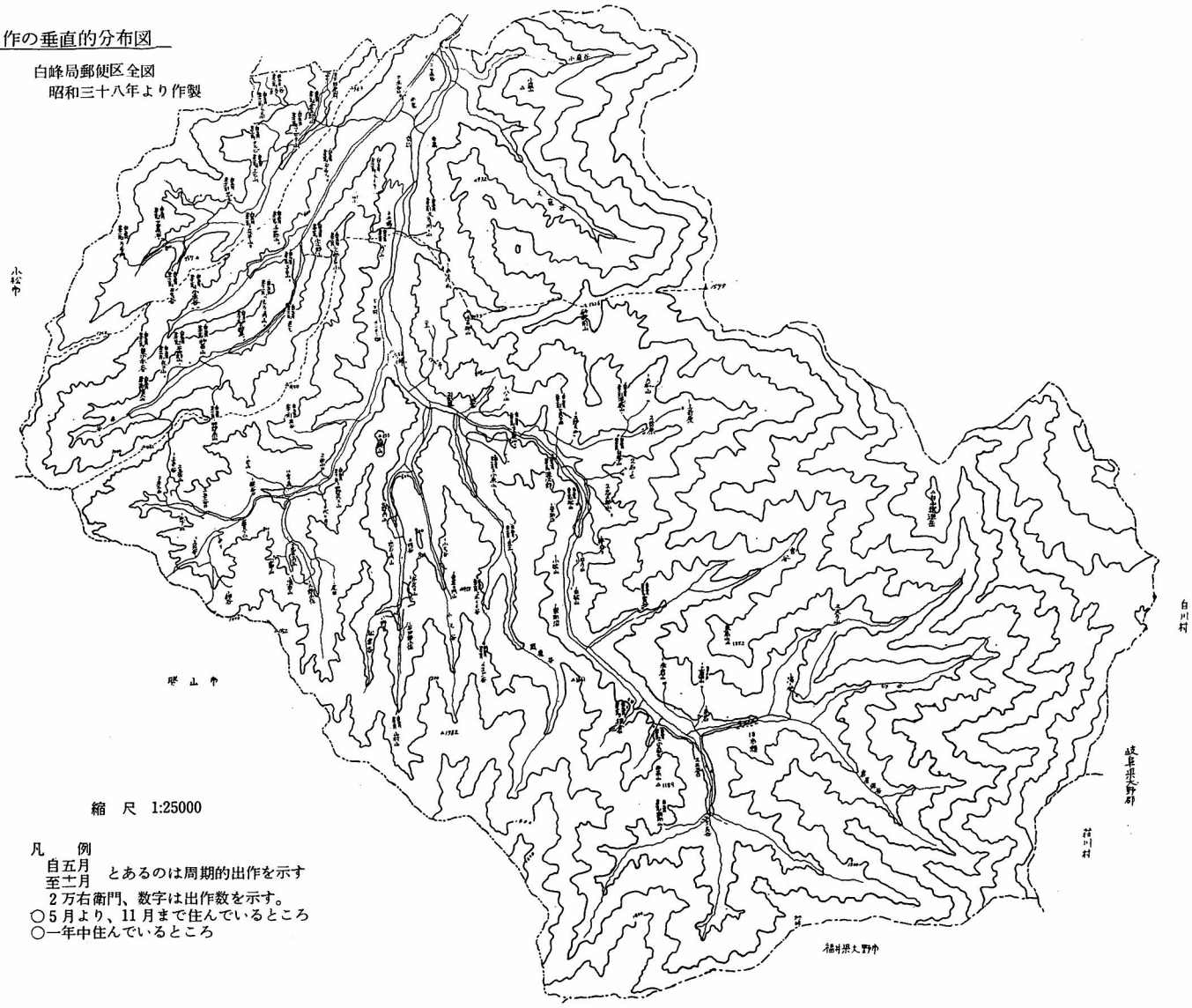
今回は，ナギハタの分布についてみてみました。もちろん，ここでみたナギハタは，前回，かんたんにふれておいた立地条件にあった地点に位置していることになります。



センター周辺のナギハタの分布

第2図　出作の垂直的分布図

白峰局郵便区全図
昭和三十八年より作製



縮　尺　1:25000

凡　例
自五月
至十月　とあるのは周期的出作を示す
2万右衛門、数字は出作数を示す。
○5月より、11月まで住んでいるところ
○一年中住んでいるところ

夏の自然教室のこと

ことしの白山は雪が多く，室堂のまわりにもいつもの倍くらい雪が残っています。そのため「お花畠」の花も少なく，雪がとけたばかりのところではやっと芽を出し始めたばかりのものもあります。

白山のような高い山では雪がとけるのもおそく，また初雪が降るのも早く，雪がない時は長くて6月から9月までの4ヵ月ぐらいで，ことしのように雪が多い時はたぶん2ヵ月ぐらいだろうと思います。

この短い時間に，山の草や木は芽を出し，花を咲かせ，実を結ぶのです。皆さんの住んでいる町の近くでは4月から10月まで半年ちかくも雪がなく，草や木はゆっくり時間をかけて大きくなれるので少しぐらい傷ついても枯れませんが，高山の「お花畠」はふんづけたり，傷つけたりするとすぐに枯れてしまうのです。

美しい白山とお花畠をいつまでも残しておきたい。そのためにできるだけ多くの人たちに高山で植物がどうやって生きているのか知ってもらいたいと思って，本誌の前号でお知らせしたように，白山の頂上で自然教室をひらきました。

8月3日から8月6日まで，夜は白山の植物のスライドを見たり，朝はじっさいにお花畠で，植物がどうして生活しているのか，どんな植物があるのかを見て，100人もの人たちが勉強をしました。

日の出を見た後，すがすがしい空気の中を朝つゆにぬれたイワギキョウ，ミヤマキンバイ，ハイマツなどの群落を見て，みんなが美しいと言い，こんな小さな植物が，一年の内10ヵ月も雪の中で生きていることにびっくりしていました。また，白山は大昔，湖の底だったのが火山活動で今のようになったので，みんなの立っている頂上は火口のふちだったし，池になっているところは火口だったのだという話にも大変おどろいていました。

こうやって多くの人たちに，白山のことや白山の植物のことを知ってもらえ，重い荷物をしょって白山へ登り，ねむいのをがまんして朝4時に起きて山頂で解説をした職員も，やりがいがあったとよろこんでいます。

次は秋の自然教室ですが，夏の自然教室で気のついたことも入れて，より楽しく，子供から老人まで楽しめるものにして行きたいと思います。

「自然を楽しむには，自然を良く知ってから」と考えています。スポーツでも何でもルールを知らなければ全くおもしろくありませんね！そのために皆さんから，こんなことを知りたい，こんなことをして欲しいというような希望がありましたら係までどんどん御連絡下さい。山登りのことでも，動物の飼い方でも何でもけっこうです。

次の自然教室を楽しみにしていて下さい。

〈研究普及課〉

今年からはじめた空カンの担ぎおろし、地元の高校生がよく働いてくれた。一度、谷へ投げ込まれたものには手の施しようがなかったけれど、空カンは徹底して拾い集め、中の水をよくきって金網カゴに詰め、せおって車道まで運びだした。こんな光景を目にしたからだろうか、登山者の中にも室堂でダンボール箱をもらって、弥陀ヶ原のゴミを担いで下山した方もあった。

名前をあげて失礼かもしれないが、私達が知った限りでは、石川県自然保護協会の方々、白山と対話する若者の集いに参加した若者達、グループナカオ、倉庫精練の山男達、白山麓連合青年団、小松基地の自衛官、これらの方々が美化登山をやって下さった。ただ一人ビニールの大きなゴミ袋を一杯にしながら登ってゆく人などもあって、白山を大切にする気持がよく判ったし、私らを勇気づけてくれた。

なかには、空カン一つでもこの袋に入れて家まで持って帰って下さいませんかと、差し出す紙袋を、無愛想につっかえされることや、便所、ゴミ捨て場で御婦人の冷めたい眼差しを浴びたりすることもあって、この仕事も時々、正直いやになる。

それでも、白山を美しくしているのは我々だ、という自負があればこそ、便器に手をつっこむこともできる。くさい空カンも担げる。

自然から恵みを受ける人間が、自然に対してやってやることといえば、こやしにもならない空カン・紙クズを投げてやることであっていいはずがない、と思う。

しかし、総じて、この夏はすばらしかった。
山を愛する人達がおおぜいいることがわかって、
実にうれしく思っている

〈自然保護課〉

石川県の自然公園　5

越前加賀海岸国定公園

石川県の自然公園を大別すると，雄大な山岳景観を誇る白山を中心とした山岳高原型自然公園と，延長約600kmにもおよぶ海岸線を中心とする海浜型自然公園とに大別できます。これまでこのシリーズで紹介してきた自然公園は前者のタイプでした。今回からは，砂丘海岸，リアス式海岸，浸蝕海岸と多様な変化に富む海岸の自然公園に目をむけてみます。

越前加賀海岸国定公園は，北は石川県加賀市篠原の海岸から南は福井県越前岬にいたる，美しい松林と砂丘，海蝕崖とがひろがる自然公園として，昭和43年5月に指定されました。公園面積は9,791.2ha，海岸線の延長108kmをもちますが，石川県内分は面積で約$\frac{1}{6}$，海岸線で約$\frac{1}{5}$となっています。

公園区域は海岸線に沿って帯状に指定されていますが，これを大別すると北部と南部の砂丘地帯，およびこれらにはさまれた丘陵とがあります。砂丘海岸は，近年，浸蝕をうけてわずかづつ後退してはいるものの，そこにはクロマツの林がひろく分布しており，白砂青松の美しい海岸線をつくりあげています。

最近，病虫害などのために県下の海岸クロマツ林が失われつつあるとき，この公園の林は頼もしい限りです。

これに対して，中部の丘陵では10数メートルの海蝕崖が直接海中へおちこみ，岬の突端には大小の岩礁や小島が散在しています。また，海食洞の発達もみられ，多彩な場所となっています。

この地域の沿岸の植生は，保安林として管理されてきたクロマツ林を中心として，暖地性のシイ・タブなど常緑広葉樹林が分布します。とくに注目されるのは，大聖寺川河口の麓島の森で，これは社業林として早くから守られてきたため，比較的安定した極相林をなし，学術的にも重要なところとなっています。こうした海岸のすぐ内陸には柴山湯などのラグーンがみられ，美しい水郷風景やカモ・ガンの飛来が訪ずれる人の眼を楽しませてくれます。

こうした諸特徴をもつこの公園を適正に管理し，利用に供するためには，海岸景観の保全とクロマツ林の維持管理を徹底する必要があります。一方，利用に関しては，金沢・小松などの都市近郊レクリエーションエリアとしての性格をもち，海水浴をはじめ舟遊，釣りがあげられます。さらに，昭和48年に公園内の国有林が林野庁の自然休養林の指定をうけ，歩道等の整備により林内散策，海岸景観探勝など利用の増大が期待されます。

ところで，この公園は背後に加賀温泉郷を有しており，そのため長期滞在型のレクリエーションの場をも造成することが必要です。そこで片野地区を中心に，健民休暇村構想の一環として，宿舎などの施設整備計画がすすめられています。

〈石川県観光課〉

たより

お盆がすぎて，かえって厳しくなったこの夏の暑さもやがて終ろうとしています。学校の夏休みの間は，例年賑わうこの辺り，今年は連日のように小中高校生の団体がセンターを利用してくれました。

市街地で失われた自然を求めて，山を訪れる人達が，年を追って確実に増えているようです。しかも，単なるレジャーではなく，自然とのふれ合いに何かを求めようとする積極的な人達が増えてきています。白山山頂での自然観察の会や，センターの団体利用などでそうした姿勢をみることができます。センターでは，こうした人達にできるだけ白山の自然を理解していただこうと，展示充実や解説方法の改善に努めております。従来の広く浅いテーマの取り組みとともに，特別展「白山のニホンザル」を企画したのも，そのひとつの試みです。センターでは研究普及課に属する5名が，各自の専攻分野で研究を進めながら，その結果を普及に生かしてゆくことを念願にしています。10月中に秋の自然観察会を催す計画ですが，そうした機会を通して，皆様方からの御意見を伺い，将来へ反映させていく考えでおります。

本誌の発行も隔月ですが，回を重ねて参りました。最近になって，県内に限らず全国各地から照会が届くようになりました。本誌の存在が広くしられるようになったのは有難いのですが，郵送料が多額におよぶこともあって，今後増える希望者に全てお分けすることに難点が生じつつあります。今のところ，これといった解決策もないのですが，当面は郵送料を負担していただいてでも配布をしていってはと話し合っています。

毎年，このシーズンには，イヨシロオビアブ（この辺でオロロとかオロと呼びます）が山を訪れる人達を悩ます。この冬は雪が多く，春おそくまで残ったせいか，この嫌らわれ者の発生が半月程も遅れて，その発生量も比較的少なくて済みました。雪の量と個体数が関係しているのではと，この夏普及部門でお手伝いいただいた，日本モンキーセンターの田中均さんが，さすがに昆虫を専攻されただけあって，私達に適切な教示をくださいました。普及の仕事への取り組みの姿勢を暗示していただけたこととあわせて感謝しています。

はくさん　第2巻　第3号

発行日　1974年10月20日
発行所　石川県白山自然保護センター
　　石川県吉野谷村中宮
印刷所　株式会社　橋本確文堂